

10) トガクシシヨウマ(戸隠升麻)

トガクシシヨウマはメギ科トガクシシヨウマ属の多年草で、日本の特産種、これも1属1種である。長野県の戸隠山で最初に発見されたためにこの名称となったが、シラネアオイとともに日本海要素を代表する植物として知られている。ちなみに日本海要素とは日本海側に特有の植物群のことで、例えば太平洋側の「椿」に対して、日本海側の「雪椿」と言った関係である。しかしこの2種に関してはその近縁種を太平洋側で見つけることは困難で、古い起源の植物の生き残りではないかと考えられている。学名は『*Ranzania japonica*』で、属名は江戸末期の本草学者で、海外にもその名前を知られた小野蘭山(1729~1810年)の名に因むものである。

ここで蘭山のことに触れておくこととしよう。本名は佐伯識博(サエキモトヒロ)、16歳の時から父の師であった松岡恕庵に本草学を学んだ。記憶力に特に優れ、一度学んだことはすべて記憶してしまうほどであったという。しかし間もなく松岡恕庵は死去。その後は独学で、本草学を研究することとなった。ところが当時の本草学は中国の李時珍による『本草綱目』が手本で、日本の動植物や鉱物などに適したものではなかった。そこで蘭山は自ら山野に分け入るところから、彼独自の本草学を開拓し、日本の本草学の基礎を築いていった。そして25歳のときには京都丸太町に私塾『衆芳軒』を開塾し、多くの門弟たちに本草学を教えた。このため蘭山が研究した本草学は広く知られる事となり、日本中から門徒が集まり千人を越える門弟たちが巣立って行ったと言われている。こうした彼の評判は当然幕府の耳にも入るところとなり、71歳の時には幕命により江戸に移り住み、幕府の医学校教授方となった。享和元年(1801年)~文化2年(1805年)にかけては諸国をめぐり植物を採集。この成果をもとに享和3年(1803年)75歳の時に研究をまとめた著書『本草綱目啓蒙』を完成。本草1882種を記した大著で、3年をかけて全48巻が刊行された。その後この書を手に入れたシーボルトは、蘭山を『東洋のリンネ』と賞賛したのである。

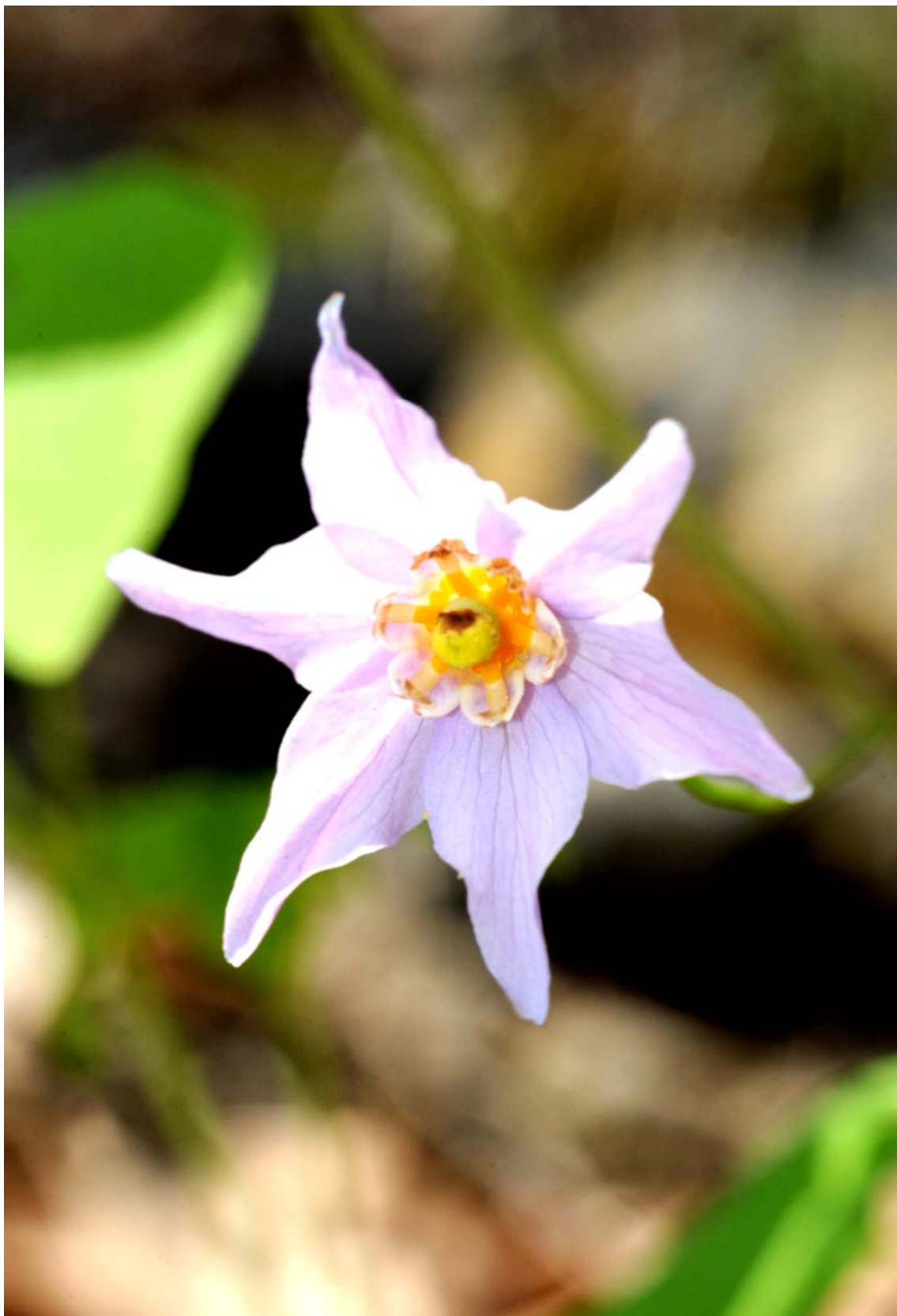
さてトガクシシヨウマの葉は三出複葉で対生して2枚つき、葉の形は左右不規則に切れ込みがある。葉の基部には数輪の花が下を向いてつき、花はやや赤みがかかった淡い紫色だが、花卉に見えているのは実は萼片で、花卉は退化している。しかしよく見ると、雄蕊を取り囲むように浅い壺型で黄色の花弁が6枚ついている。花は自生地では5月下旬から6月下旬ごろに開花する。雪が解けて春たけなわの季節である。果実には甘味があるために、アリが巣へ運び、そこで繁殖する。ヤマブキソウなどと同様に『アリ散布植物』の1つなのである。特に湿ったところを好み、雪溪の近くや、沢沿いの谷間などの木陰で、美しい花をひっそりと咲かせる。このため分布は日本海側の多雪地帯に多く、白馬、戸隠、尾瀬をはじめ、北は青森県にまでいたるものの、個体数は少なく、自生地での生育範囲も極めて狭いため、最近の野草ブームの中、絶滅が特に危惧されている。



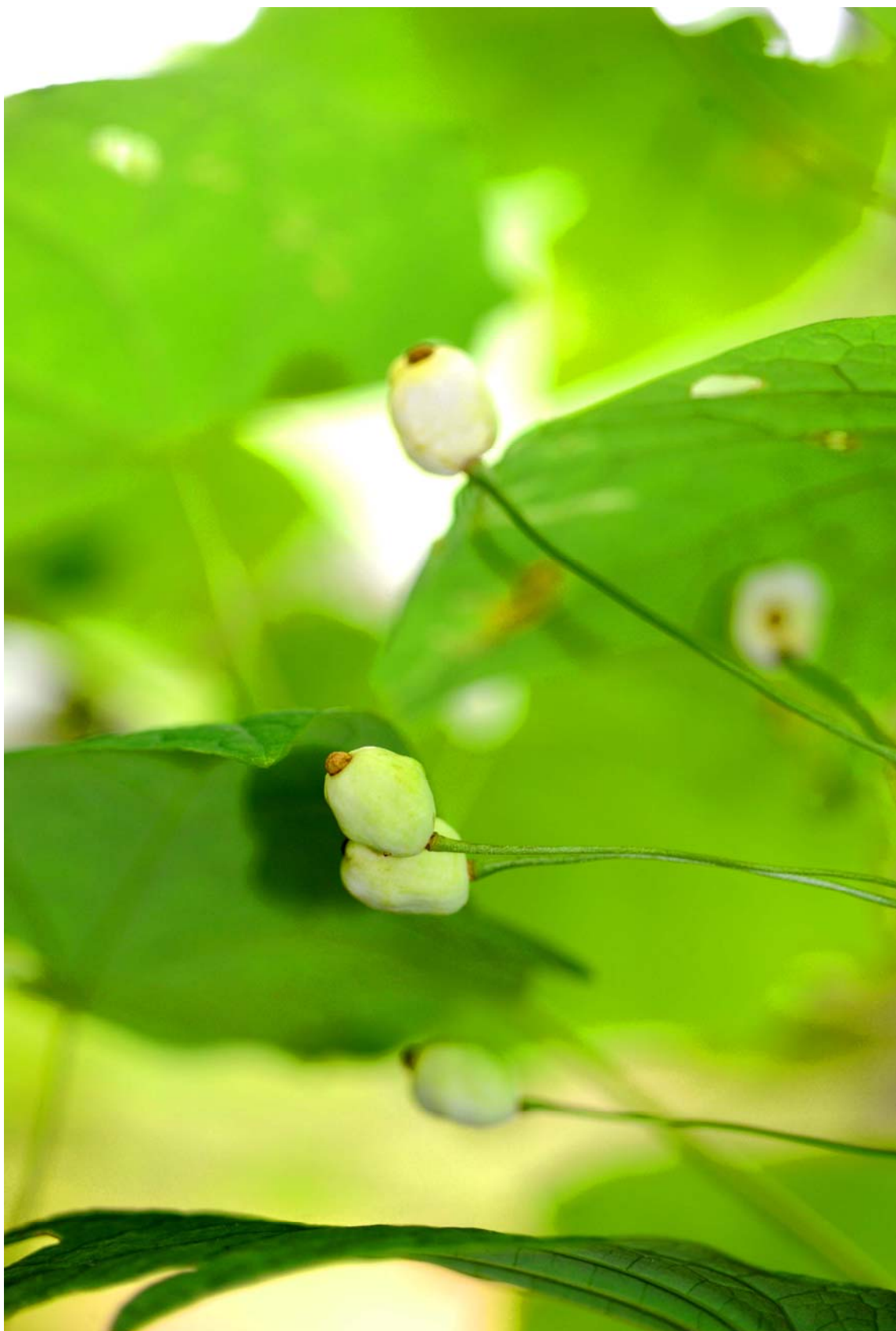
『トガクシショウマ』はメギ科トガクシショウマ属で、戸隠山で最初に発見されたためにこの名前が与えられた。やはり1属1種の植物である。湿ったところを好み、5月～6月、沢沿いの谷間などの木陰で、美しい花をひっそりと咲かせる(長野県軽井沢町)。



トガクシショウマの花弁は雄蕊を取り囲むように6枚あり、花弁に見えているのは萼片である。



中央の赤味がかつた6枚が花弁で、外側の大きな花弁に見えるのは萼片である。



7月上旬頃になると、こんな白い果実を結び、種子はアリによって運ばれる。

[目次に戻る](#)